

小林一美君の中国史研究について

小 島 晋 治

数日前、居住地（西東京市）の市役所から、近々、七十七歳敬老の祝い金一万円を届けに参上するとの通知を受け取った。神大を退職した七十歳の年につぐ二度目だ。次回は八十八歳の時、とのことだが、それまで生きていられるか、甚だ心許ない。まして創造的な歴史研究など、もうとてもできない。そんな私ではなく、小林君の仕事のエキスを吸収して研究を發展させることのできる後続の研究者にこそ、書いてもらうべきで、執筆者の人選を誤っていると思われる。しかし、とくにこの近年の私生活上の大変な困難に耐えつつ、立派な仕事を続けている彼の退職にさいし、拙い一文を献上することも意に叶うことであり、敢て執筆を引受けた。

彼と初めて出会ったのは、一九六〇年代前半、彼が教育大大学院で中国近代史研究を進めていた時、非常勤講師としてここに参上したのがきっかけだった。

当時の教育大は中国近代史研究のメッカとも言えるところで、彼が『『辛亥革命研究会』発足前後——一九六〇年代、わが学生時代回顧——』（『近きに在りて』近刊四八号収録予定）に書いているように、助手をされていた野沢豊氏を中心に、のちに中国近代・現代史研究を荷うようになる優秀な人材があまた集って、活潑に「争鳴」してい

た。自力で日本軍国主義の侵略と戦い、国民党との内戦に勝利し、人民共和国を成立させてすぐ、朝鮮で強大なアメリカ軍と戦って屈することのなかった中国革命への共感と讃美が、安保闘争前後の学生の中では支配的だった。いわば中国革命が最も輝いて見えた時代だった。教育大には五〇年代後半の中共党の「反右派闘争」の中での知識人や批判分子への苛噴ない弾圧の実相をバクロし、批判する戦前からの中国史研究者である有名な故小竹文夫教授もいたのだが、小林君を含めて多くの学生は彼の意見に耳を傾けようとはしなかった。

戦後、日本の若い中国史研究者は、戦前から戦時中の日本では、中国は内在的な発展の契機を欠く「アジア的（停滞）社会」であるという見方が支配的で、これが日本の中国侵略を合理化したのだ、という批判をもつようになり、中国社会にもマルクス主義的な世界史の普遍的発展法則が独自な形にせよ存在したと考えるようになっていった。その中で、とくに農業経済が最も発展していた江南農村の副業的農村手工業の発展、これによる農民の地主に対する自立性の強化、これを基礎条件とする抗租（地主への時代引下げ、不払い闘争）及び国家権力に対する抗糧（土地税の引下げ闘争）の農民運動の発展を中国の反封建革命の原動力として重視する研究が、故田中正俊氏らを中心に行われた。私も当時、教育大の史学科が刊行していた『史潮』に、この運動と太平天国の関係について研究した論文を発表したことがある。

小林君が発表した最初の本格的論文「太平天国前夜の農民闘争―揚子江下流デルタ地帯における」（東京教育大 学アジア史研究会編『近代中国農村社会史研究』、大安、一九六七年）は、上海に近い江蘇省昭文県で一八四六年に起こった抗租暴動について、その主体となった借地小作農民（佃戸）と、その対象となった地主のあり方について、この地域ではむしろ佃戸が村落の共同体的結合ならびにその連合の主体となっており、これが「抗租」の組織

的基礎となっていたことを明らかにしたものだ。中国の農民の成長を積極的に評価しようとするこの研究を、私は当時高く評価しつつ、しかし小林君がこの地域に成立していた綿作についての貨幣地代を「現物地代の単なる転化形態」をこえた「定額金納地代」とみなし、綿花の価格騰貴と相まって、小農における「萌芽的利潤」の形成をもたらしたとする見解を、史料の誤読による過大評価として批判したことがある。（十九世紀中葉における農民闘争と大平天国）『大平天国革命の歴史と思想』研文出版、一九七八年所収）当時の小林君は、農民革命、農民闘争を中国の近代を推し進めた動力と考える戦後の中国史研究の新しい潮流の中に身を置いていたと言えるだろう。

この論文が発表された六〇年代後半から、日本でも中国でも激動の嵐がまき起り、一九六六年に起こった文化大革命は、日本の、とくに中国近現代史研究者にも大きな影響を与えた。多かれ少なかれ日本共産党の影響下にあった左派の研究者は、文革に共感し、さらに支持するものと、文革を批判して中共と対立するようになった日共を支持するものに分裂し、教育大の研究者グループも、折からの全共闘運動への立場ともからまって、その影響を受けたようだ。直接その中にいなかった私には詳細は不明だが、小林君はどちらかと言えば、当初は文革と全共闘運動に共感する側にいたのではないかと思う。恥づかしながら私もそうだった。

一九六九年に博士課程の単位を取得して満期退学した彼は、佼成学園の世界史担当専任教員に就任して組合運動を闘いつつ、教育大、名城大、名古屋大学で非常勤講師として講義し、ついで七五年から八六年まで名城大学の専任を続けて、神奈川大学外国語学部に移った。中国史を日本史のみならず、世界史の大きな流れ、構造の中で捉えようとしている彼の方法は、この長い教員生活の中で培われたのだろう。

この間の研究業績の中で、彼の近代中国史研究の新たな飛躍として、広く注目されたものが『思想』五八四号

(一九七三・二)に発表された「抗租・抗糧の彼方」だった。もっぱら経済史の観点、方法によって分析され、評価されてきたこの農民闘争を「政治」闘争、権力との闘いに飛躍させる契機となったものとして民間異端宗教を重視し、しかし、「飛躍」と同時に本来指向された「経済」的内容との乖離が生じていることを明らかにしたものだ。つづいて異端宗教の代表とも言うべき白蓮教が地域をこえて農民を広く組織し、長い時代にわたって持続しつづけたありようを探り、それがおこした「嘉慶白蓮教反乱の性格」を論じた。

教育大には、中国の民間宗教研究の代表者とも言うべき酒井忠夫教授がいたが、左派の学生は一部を除いてそれまで余りその研究業績を重視してきたようには思われない。そのテーマがこの時代に小林君らによって着目されるようになったのは何故か、上にのべた時代の激動と関係があると思われるが、これについて彼に聞いたことはない。たぶんこの延長線上に、彼は七〇年代後半以降、義和団運動について、その思想、組織、運動の形成課程、その具体的様相について一連の論文を書き、鎮圧に当たった八か国連合軍の行動、とくに日本の対清政策と軍の行動、日本の与論などについての分析を加えて、著書『義和団戦争と明治国家』（汲古書院・一九八一年）を刊行した。これは日本における最も包括的な義和団研究の業績だった。このころから中国の改革・開放政策が進み、中国の研究者や学会との交流が深まり、彼の研究は中国でも注目されるようになった。又、彼は中国での義和団研究の批判的検討をつうじて、中国人の歴史認識、歴史評価の特質について、鋭い見解を発表した。

中国の義和団研究者との交流を契機に、彼はそれまで日本の研究者にとって「夢のまた夢」でしかなかった華北農村社会の民衆運動の現地調査に参加するようになった。この一九八六年末から一九九〇年にかけての三回の農村調査をつうじて、彼は中国の農村、農民と日本のそれとのちがいを痛切に認識するようになった。これ以後、彼は

故郷長野県の農村、農民のあり方を念頭におきつつ、これとの対比において中国の農村、農民の特質の究明に力を注ぐようになる。その成果は「家産均分相続の文化と中国農村社会」、「日本と中国の国家・社会・文化の比較史的考察」、及び東洋文庫における講演「中国近代における華北農村の人々」として公けにされている。

最後に最近の仕事として、特にふれておきたいことがある。

私の神大在職中の末期、中国で『新編中国地方志叢書』が刊行され始めた。改革・開放の中で編纂されたため、中国革命と人民共和国成立以後のさまざまな運動―反右派運動・大躍進運動・文革など―の影の面もかなりの程度記されており、中国近代史・現代史研究にとって非常に役に立つ資料があまた収められている。厩大で高価になるため、又、この書的重要性への認識が薄いため、これをすべて購入している大学はあまりないようだ。私は購入を申し入れ、実現していただいたものの、これを活用できぬうちに停年を迎えてしまった。だが小林君は恐らく日本で最もよくこれを活用している一人だ。それによつて書かれた「中華帝国を夢想する叛逆者たち―中国における帝王革命幻想（ユートピア）の歴史と磁場」（小林一美・岡島千幸編『ユートピアへの想像力と運動―歴史とユートピア思想の研究』お茶水書房。二〇〇一年）は、中国史上危機の時代に、農民がくり返しか、げ、出現した「真命天子」が、中華人民共和国成立以来二十世紀末まで、非常に多くの地域で何人も出現していることを明らかにしたものだ。又、「中共、中央革命根拠地における客家と土地革命戦争」（人文研究一五五集・二〇〇五年三月）及び「中共の『土地革命戦争』、地主富農打倒から反革命肅清へ」（『史潮』新五十七号、二〇〇五年五月三十一日）は、従来の公認の党史、革命史における善（中共党・毛沢東・貧農）悪（国民党・地主・豪紳）二元論の虚妄のベールをはぎとり、日本とはことなる中国農村の構造、そこでの苛烈な相互の暴力行使の伝統から中国革命の実相を明ら

かにしようとしたものだ。

小林君の仕事は極めて広く、多岐にわたり、ここにしるしたものはそのホンの一部にすぎない。近年とくに細分化、専門化している中国近代史―この分野に限らないが―の研究状況の中で、小林君の仕事は必ずしも若い研究者によって、当然受くべき注目・評価を受けているように思われない。まことに残念なことだ。良き後継者を得て彼の仕事が継承されること、さらに彼自身が早すぎた退職によって得られるだろう時間を活用して、これまで同様、鋭い時代・歴史感覚に裏づけられた研究成果を発表されつづけられるよう期待すること切である。

（九月二日しるす）